

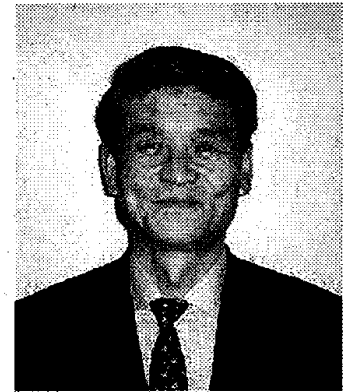


一九八三(昭和五十八)年、阪堺上町線帝塚山三丁目駅前にあった故中村画伯邸の跡地の屏がつぶされた。その場に残された蔵の事務所前にいきなり大きな看板が立った。「帝塚山らしさってなんやろか?」

ただそれだけが書かれた看板に、わたしは生まれ育った帝塚山への挑戦的なメッセージを感じ

氏田 耕吉

帝塚山街づくり交流会・代表取締役
ウジタオートサロン



街づくり20年 (上)

人が街をつくり、街は人をつくる

た。吸い込まれるように入っていくと、現在同地に立つ商業施設「ミューズコート帝塚山」を計画したR&Dアンシエイツの小山雄二さんがいた。

その日から「帝塚山はこのままで良いのか、将来どう在るべきなのか」と連日のように地域外出身の開発スタッフと話し込んでいく。後から考えると若者のとりとめのな話だったのかもしれない

「いが、わたしは会(略称TMK)だっ生まれ育った帝塚山が好きだったことにあらためて気付いた。その後流行のようになった「街づくり」という言葉を聞いたの

もその時が初めてだった。近所の三笠寿司(すし)の多田嘉幸さんを加えた三人で街を考える会はスタートする。その後は最初の三人が次のメンバーを誘い、六人に、六人が十二人と増えていき、会合を重ねていった。帝塚山に何らかの関連を持つ人たちが増えてきて、やがて出来上がったのが「帝塚山街づくり交流

集まりには肩書や思想は関係なく、自由に「街づくり」への思いを語る。会則、会費、会長などは一切なし、ルールは「政治宗教抜き」だけだった。各自をよく知り合うことから始まり、ディスプレイやシンポジウムなども行った。会報誌の代わりに「帝塚山流通新聞」なるものを作り、自主採算で今も発行を続けている。

そして八六年十二月のTMKの忘年会で、「走ればくらのチンチン電車が発案される。当時車体広告を使った企画で小学生を対象に

「電車の絵画コンクール」を行い、その二点を実際の電車に描いて二年間走らせようというものだった。TMKの有志による「走ればくらのチンチン電車」実行委員会(委員長多田嘉幸)が発足したのは、年の瀬の迫った十二月二十五日だった。

「走ればくらのチンチン電車、そして自分たちの街」と決まった。TMKメンバー企業が電車広告を協賛いただけるとはすぐには決まらなかったが、その後が続き続かない。しかし実行委員各自による地道な運動の結果、実に多くの方々の協力でやっと実現でき

ることとなる。人づてにお願いし、何とか二月五日に朝日新聞夕刊の社会面トップで取り上げられる。これをきっかけに四大新聞をはじめテレビ、ラジオ各局の取材が始まり、大きな話題となった。全国から集まった五千八百七十二名の応募から小学六年生の沢田美穂ちゃんの絵が決まり、四月五日から二年間走らせることができた。

そして、これをきっかけに「帝塚山街づくり交流会(TMK)」の名前は一気に知れ渡り、メンバーが増え、さらに次の活動へとつながっていくことになるのだった。(うじた・こうきち 大阪市阿倍野区帝塚山)

この欄に対する感想(400字以内)をお寄せください。採用、掲載分には図書カードをプレゼントします。「濃標」編集部